

（おまけ）『伊集院光のてれび』真剣じゃんけん：囚人のジレンマと共有地の悲劇

『伊集院光のてれび』番組レギュラーを決めるための真剣じゃんけん。8人で争う。ルールは以下の通り。

- ・基本は普通のじゃんけん（ぐー、ちょき、ぱーを使ったもの）
- ・ただしじゃんけんを行うのは今から2時間後
- ・バラバラの手であいこの場合は再じゃんけん
- ・全員が同じ手であいこの場合は全員合格
- ・（追加ルール）3人まで入室可能な相談室を用意。1人が一緒に行きたい人を指名できる。1回の制限時間は5分まで、部屋を使えるのは3回まで。

もちろん全員が同じ手を出せば全員幸せになれる。だが、単に勝てばそれで終わりではなく、番組に出演できる権利を得られるだけ。全員が合格すれば、それだけテレビで目立てなくなるかもしれない。また、芸人特有の「番組的にみんな同じで盛り上がるかしら？」という発想が入り交じり、混沌としていく。

それに加えて、最初から「私裏切りますよ」と宣言する人や、空気を読まずに変なボケをする天然な人、「なんでグーを出さなければならぬんですか。人に言われてそうするの、嫌なんですよね」という人が出てきて、全然まとまらない。「性差ではないんだろうけれども、今回の方がまとまらない気がする」と、伊集院自身も認めているほどだ。

男性陣が多かった最初の真剣じゃんけん比べ、全員女性の真剣じゃんけんは、より本音が多く出ているように思う。相談室で裏切りの相談をするときでも「1人で裏切り者になるの嫌なんですよ。みんな女子だから本当に怒るんですよ」という発言が。女子特有の、その場限りにできない恨みの深さがあるという。そのためか、裏切りの相談をしてきた後には、後ろめたさとプレッシャーが態度に出てしまう。駆け引きと、裏切りと、本音の入り交じりでは、前作に勝るとも劣らない展開だ。（以上、引用）

「囚人のジレンマ」

上記のルールで、AとBの2名でテレビ番組のレギュラーを決める「じゃんけん」をする。下図は二人で一緒に同じ手を出すことにして、二人ともレギュラーになろうと約束した場合の「囚人のジレンマ」

		B	
		一緒に決めた手を出す	一緒に決めた手以外を出す
A	一緒に決めた手を出す	2名ともレギュラー しかし一人で目立ってない	Bだけがレギュラー Bは目立つことができるが、 Aに負い目を感じる
	一緒に決めた手以外を出す	Aだけがレギュラー Aは目立つことができるが、 Bに負い目を感じる	ガチンコ勝負※結果的には「あいこ」 互いを裏切る形。結果はどうあれ相手に対して 負い目を感じる

「共有地の悲劇」

レギュラー候補は8人。全員がレギュラーになると「出しろ」（番組に出演できる時間や活躍できる割合）は1/8。レギュラーが少ないほど自分が活躍できる可能性が高まる。そこで、Aさんがレギュラーを少なくするために工作すると、Aさん以外の誰かがAさんへの対抗処置に出てくる可能性がある。Aさんは自分の工作によって、自分がレギュラーから外れる可能性も出てきてしまう。自分の利益をより大きくするために動くことが、自分の利益を損なう可能性をもたらす。

参考サイト：杉村啓「若手芸人をもてあそぶ「伊集院光のてれび」はバラエティの名を借りた実験」（2015年10月9日）

<http://www.excite.co.jp/News/reviewmov/20151009/E1444322007433.html>